てカンディを陷れ、王をして佛陀の齒を奉じて出奔せしめたるのみ。されどこの時マライ兵は惡疫に襲はれ、飢餓に迫まり、且つ退路を絶たれて如何ともすること能はず、その過半は力竭きて遂に高地のシンハル軍に屈服し、他は僅かに免かれて無徑の森林に彷徨せりといふ。

ラージア・シムハ三世の死後位に登れる諸王は、喜びて僧侶を保護せりと雖も、天性懦弱にして僧院の腐敗を改革すること能はず。スリ・キラ・バラッカマ・ナリンダ(Sri Wira Parakkama Narinda)(一七〇一—一七三四年)は、佛陀の齒を安置せんがために、ダラダ・トリガワ(Daladá Maligawa)の殿堂を營み、その外壁を飾るに三十ジャタカ(Jâtaka)(佛陀誕生の歴史)を以てせり。されどその繼承者ヰジャヤ・ラートジャ・シムハ(Vijaya Râja Simha)(一七三四—一七四七年)の世に、僧侶は分散して國内に影を留めず、而して佛教の教理は、印度教、鬼神崇拜、佛教の慣例を混ぜる不可思議物となりき。カンディの諸王多くはマツラの王女を娶りて、セイロン、インドの關係親密を加へてより、婆羅門の諸神はセイロンに傳播し、その偶像は佛教の形式を去りて、昔時の精神を恢復せるは、實にキルチ・スリ・ラージア・シムハ(一七四七—一七八〇年)の世にあり。この時セイロンの使は、國王の命を奉じて、僧侶を迎へんがためにシャムに赴けり。かの高僧ウパリ(Upali)は、また實にこの時を以てセイロンに來れるなり。オランダ及びイギリスの宗教に對する寛容は、この後佛教をしてその勢力の一部を恢復せしめたり。されどその教理は婆羅門諸神及びドラヰダ鬼神の崇拜を混じて、既に昔時のものにあらず。

オランダは初めセイロンの産物によりて利益を收むること多かりき。ポルトガルより奪ひし肉桂の栽培地は擴張せられず、然れどもオランダの植民は深くその栽培に意を用ゐ、且つその貿易を獨占して價を不廉ならしめたり。他の諸島これを見て、盛に肉桂を栽培してこれと利益を爭はんとし、オランダの軍隊また肉桂貿易の利益の大部を奪ひて給料の不足を償はんとす。こゝに於いて肉桂貿易は漸次衰へ、遂にその費用を償ふこと能はざるに至りき。

第十章　セイロンに於けるイギリス及びその統治

オランダ海上權の衰頽は、セイロンの貿易に大なる影響を及ぼせり。これより先きオランダがポルトガルの地位を奪へるは、その權力の絶頂に達せる時にして、當時その貿易はイギリスに五倍せりといふ。されどコロンボ及びジャフナの戰の間に、イギリスの國會は航海條例を通過し、他諸國の商船の貨物を積みてイギリス領に來ることを嚴禁せり。こゝに於いて他諸國の貿易は頓に衰へ、一七九二年には、イギリスの五に對して僅かに二を占むるのみ。一七九四年フランス軍のオランダに進むや、イギリスはこの機に乘じてオランダの貿易權を覆し、且つケープ(Cape)、マラッカ、コチン(Cochin)、モルッカ(Moluccas)の諸植民地を奪へり。セイロンの占領に至ては、イギリスの容易に効を奏せる所なりき。一七九五年マドラスのイギリス總督ロード・ホバート(Lord Hobart)は、ブランカート(Blankert)をして、一艦隊を率ゐてセイロンに航せしむ。ブランカート乃ちその諸城を攻めて忽ちにこれを陷れ、翌一七九六年二月十五日戰はずして、オランダ政廳の所在地たるコロンボを降せり。蓋し、オランダの總督アンゲルベック(Angelbeek)は、賄賂を受けてイギリスのために斡旋せるによる。されど東印度會社の統治は、時のオランダ政廳に比して苛酷なるものあり、土民これを憤りて、この年の末所在に蜂起してイギリスに抗す。こゝに於いてイギリスはセイロンを占領し、直にこれをその領土となせり。

一七九八年フレデリック・ノールス(Frederick North)(後のギルフォード伯(Earl of Guilford))始めてセイロン總督となる。ノールスはシンハル王スリ・ラージア・アディラージア・シムハ(Sri Rája Adhirája Simha)の宰相ペレメー・タラエー(Pelemeh Talaweh)をして寶國の運動をなさしめんとし、一七八〇年より一七九八年に至るの間、密かにこれと議する所あり、使節護送を名として有力なる一軍をカンディに送遣せり。蓋し必要なる場合には、これによりて國王を脅し、その要求を貫徹せんとせるなり。されどイギリス軍は自然的障碍に遭ひて進むこと能はず、而して僅かにカンディに達せる一部は、その目的を達せずして退かざるべからざるに至れり。こゝに於いてイギリスは一八〇二年を以て公然戰を開き、マクドエル(McDowell)をして三千の兵を率ゐて首府に進ましむ。シンハル王これを見て出でて奔り、首府遂にイギリス軍の手に歸す。されどデヴィー(Davie)の率ゆる軍隊は熱病に襲はれ、僅かに死を免かれたるものは、一八〇三年悉く敵の殺す所となる。イギリス軍これを聞

きて、直に復讐する所あらんとせしも、ヨーロッパの戰亂に妨げられてその意を果さず。然るにシンハル王スリ・キッカマ・ラージア・シムハ(Sri Wikkama Rāja Sinha)(一七九八―一八一五年)は、宰相の陰謀發覺してより妄にその臣民を疑ひ、これに臨むに殘忍酷薄を以てす。臣民これより王を怨むもの多し。こゝに於いてイギリス軍は容易にカンディを占領し、一八一五年二月十八日、王をビヅムリー(Beaumury)村に捕へ、身を終ふるまでこれをマドラスに幽せり。イギリス軍のカンディ占領後、セイロンの諸酋長は會議を開き、一八一六年三月を以て、王國の統治權をイギリスに移すに決す。而して一八九五年、サー、ジョセフ・エスト・リッジエー(Sir Joseph West Ridgeway)は、新たにセイロン總督となりてこれよりセイロンは全くイギリスの領土となれり。

錫蘭島史　終

明治四十一年十月十二日印刷
明治四十一年十月十五日發行

（印度五千年史奥附）
定價金貳圓

著作者　高桑駒吉

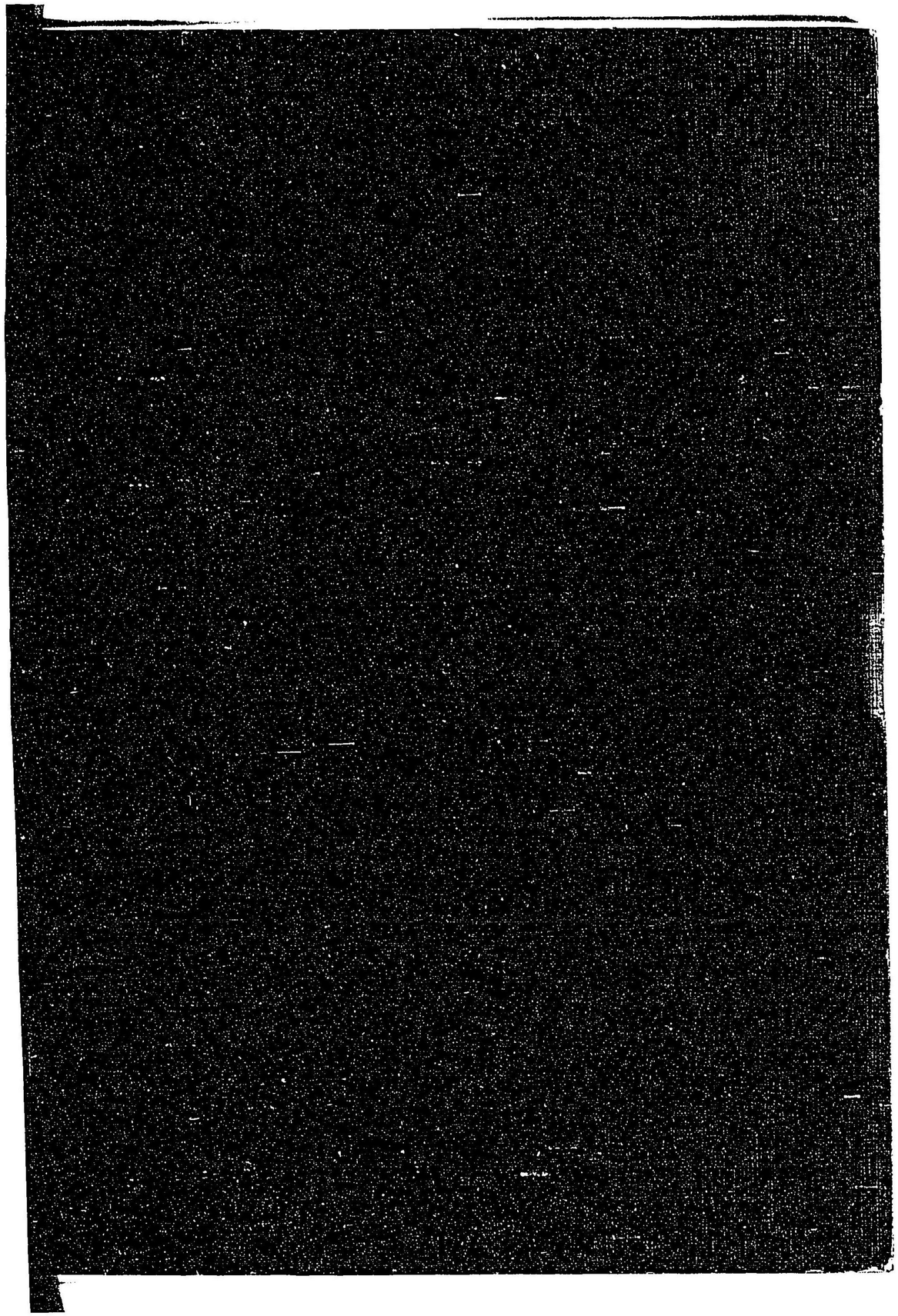
發行兼印刷者　東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地　大日本圖書株式會社
右代表者　專務取締役　宮川保全

發賣所　東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地　大日本圖書株式會社
大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷　大日本圖書株式會社支社
各府縣下　特約販賣所

大日本圖書株式會社出版圖書特約販賣所

北海道 村上商店。川南。魁文舍。一二堂。富貴堂。**東京府** 丸善。林平。大倉。水野。育野。三友。內田。杉本。文林堂。寶文館。北隆館。泰東同文局。文星堂。中西屋。東京堂。金刺。文會堂。勉強堂。播磨屋。地球堂。修學堂。二松堂。山岸。松邑。東海堂。有隣堂。十字屋。良明堂。森江分店。岡崎屋。森江。杉村。池田。蓋山房。**神奈川縣** 弘集堂。田沼。丸屋。正心堂。**新潟縣** 高桑。高橋。覺張。野島。四村。中山。萬松堂支店。北光社。目黑。山本。柿村。越佐同盟書館。**埼玉縣** 水野。いろは堂。尙古堂。高野。**群馬縣** 煥乎堂。木田。**千葉縣** 多田屋。**茨城縣** 伊沼。明文堂。川又。大塚屋。寺田。南龍堂。高木。宮田。**栃木縣** 內山。永樂屋。平石。青木。**愛知縣** 川瀨。永東。**靜岡縣** 吉見。谷嶋屋。古澤。三原屋。大石。**山梨縣** 柳正堂。**岐阜縣** 郁文堂。郁文堂支店。住。**長野縣** 日新堂。水琴堂。朝陽館。四澤。四澤支店。盛文堂。丸山。**宮城縣** 薩崎。松榮堂。英華堂。**福島縣** 虎屋。陽文堂。上野屋。**岩手縣** 文港堂。佐藤。近藤。文明堂。**青森縣** 青霞堂。今泉。今泉支店。伊吉。**山形縣** 盛文堂。日向。牧野。相原。八文字屋。**秋田縣** 曙堂。東海林。藤嶋。大澤。**富山縣** 中田。學海堂。清明堂。**京都府** 若林。文港堂。松田。南波。**大阪府** 中村。岡島。金川。中川。柳原。小谷。松村。開成館。寶文館。前川。丸善。田中。三宅。盛文館。石田。中井。竹內。北村。**兵庫縣** 熊谷。石田。福浦。竹內。木村。奬師寺。四村。中井。**長崎縣** 虎與號。集英堂。**三重縣** 安屋。**奈良縣** 文進堂。文進堂支店。啟倣館。**滋賀縣** 廣田。澤。**福井縣** 品川。中村。**石川縣** 宇都宮。**鳥取縣** 德岡。今井。久松堂。**鳥根縣** 安達。川岡。板倉。**岡山縣** 武內。**廣島縣** 積善館。芸香堂。原田。**山口縣** 含英堂。梅龍堂。日新堂。超世館。**和歌山縣** 平安堂。**鳥島縣** 靜壽堂。**香川縣** 明益堂。明文舍。龜友堂。**愛媛縣** 向井。土肥。足立。阿部。**高知縣** 富士堂。**福岡縣** 元野木。積善館。博文社。金文堂。**大分縣** 甲斐。野依。梅津。中園。佐野。**佐賀縣** 牧川。汲古堂。平井。**熊本縣** 長崎。**宮崎縣** 修進堂。谷。**鹿兒島縣** 吉田。金光堂。**沖繩縣** 小澤。**臺灣** 新高堂。

63
230



63
230

003452-000-7

63-230

印度五千年史

高桑　駒吉/著

M41

ACC-2146

31. 8. 26